
X

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

X

【著者名】

EN

【Zマーク】

Z7969Z

【作者名】

EN

【あらすじ】

悪の組織と

誘拐と

巨大生命体

十八禁要素皆無だからこちに張りなおしたもの

(前書き)

読みづらい所だらけ（だけ？）で恥ずかしい話
途中で止めたくなつたら止めて下さい

改めて読んで見ると十八禁要素皆無しだつた元十八禁の話

公平の体内時計では午前七時に目が覚めて午後十一時に眠くなる。朝の日差しがその覚醒を助ける。

しかし、今日の目覚めは不思議だった。
日差しを感じない。

光そのものが届いて来ない。

いつものように布団の中に自分がいない。
部屋が異様に狭い。

というより部屋が動いている感じがする。
その他諸々…。

此処は本来、自分が居るべき場所ではない。

部屋の中を調べようとしたが、体が思うように動かない。

足枷と手錠によつやく気が付いた。

部屋の動きが止まつた。

恐らく此処はトラックの荷台だらう。

公平はこんな風に、人が寝ている間にその部屋に忍び込み、そして誘拐していく集団に一つ心当たりがあった。

それは、去年まではフィクションの中の存在でしかなかつた。彼らは『秘密結社ファルコ』と名乗つてゐる。

要するに『悪の組織』というやつだ。

「出ひー。」

久々に感じた光と共に、乱暴な声が聞こえる。

「足枷を外してくれ」

公平は無駄に逆らうよりは大人しくしている方がいいと思った。
この組織に誘拐された=安全、というのが世間の常識になつてゐる。

彼らはフィクションの『悪の組織』のように人間を改造して怪人を作る。

だが、体の改造手術の技術は超一流なのに、脳改造手術の技術は二流以下。

改造人間たちは、全て一般人として、あるいは組織と戦うヒーローとして、生活している。要するに、誘拐されて、体は改造されても、脳改造が失敗するのは確定しているから、手術が終わつたらその力で逃亡すればいいのだ。

当然、公平は改造人間になりたくはなかつた。
しかし、背に腹は変えられない。

これが唯一にして絶対の逃亡手段なのだ

もつとも、ファルコの目的が本当に改造人間を作る事だつたのなら、だが。

公平は当然自分が改造されるのだと思っていた。

更に『ファルコは大したことのない組織だ』、と考えてもいた。
だから、ファルコの人間について行く時にも殆ど恐怖しなかつた。
彼らに連れて行かれた部屋にいる時に少し気が大きくなつた。
そして、見張りの男に話しかけてみたのだった。「なあ、俺は何に改造されるんだ?」

見張りは笑つていた。

不快な表情を見せると思つていただけに少し驚いた。

「お前は自分が改造されると本当に思つてんのか?」「それ以外に誘拐する理由なんか…」「あるんだよ」

見張りは笑つたままで、公平は、その時初めて恐怖を感じた。

「じゃあ、な何で誘拐なんか」

「俺たちは、既に最終兵器を造り上げた。後は生贊だけだ」「イケニエ!?

「大体、あんだけ改造人間の作るのに失敗してんのに、懲りずにま

た改造人間作るのかよ

「じゃあ何を作った！？」

「人工の巨大生命体や。組織ではXと呼ばれている。お前はそれに

喰われて死ぬ

「そんな…」

組織が作っていたのは怪人じゃなくて怪獣だった。

改造されるのでなく怪獣の餌だった。

状況は絶対の安全から、最低最悪の状況へと変化したのだ。

「ああ…」

見張りはニヤニヤこぢらを見ている。

最初から殺すつもりだったからあんなにベラベラ喋ったのだ。
ピロピロと音がした。

見張りの携帯だ。

彼はやつぱりニヤニヤ見ながら叫びげる。

「出る。今、Xに会わせてやる」

「会いたくない…」

その声は目の前の男にも届かない。

5

小さな扉の前まで来た。

この先にXがいるらしい。

見張りだった男が扉を開けて、無理やり中に入れた。

暗い。

だが予想していた獸臭さはない。

と言つより、少し良いニオイがする。

「何が居るんだよ…」

瞬間パツと明るくなつた。

照明がついたらしい。

それでも巨大な影が公平を覆っていた。

恐怖で上を向けない。

そして大きな声がした。

「君が今日の晩御飯？」

驚きと好奇心が恐怖を超えた。

上を見上げて、そして後悔する。

公平は、両手両膝をついた、巨大な少女の下にいた。確かに、これも巨大な生命体だが、てっきり姍姍的な物がいるものだと思っていたから驚いた。

「あれ？ 晩御飯？ え？ 朝御飯じゃなくて？ 今何時？」

次にもう夜になつたのかと驚愕した。

「今は午前の十時だよ」

少女が告げる。

「じゃあ、何で晩御飯なんですか？」

恐る恐る質問する。

「組織は改造で残虐な兵士を作るのを止めたんだよね。脳は思い通りに改造出来ないから。だから、こうして、残虐な性格の兵士を作ることにしたんだよ」

話が見えない。

「それと、俺が朝御飯じゃなく晩御飯として食べられるのどビのよ
うな関係があるのでですか…？」

「え？ 分からないの？ 全然知らない人を食べるのと、半日でも一緒にいた人を吃べると、どっちがより残酷になれると思いますか？」
ああそういうことですか。

取り敢えず公平が食べられるのだけは確定してゐるらしい。

「僕は今日、君に会うのをずっと待つてたんだよ」

理由が、『食べるため』で無ければいい台詞だ。

Xは可愛いボクつ娘だ。

感動的だ。だが、今ではそんな事は無意味だ。
公平はもう諦めていた。

Xが美少女だつたのがせめてもの救いかな、なんて思つほどに追い詰められていた。

「…ううのは、最初の一回目が大事なんだよ。一番怖いのは一番最初だから、ねえ聞いてるの」

Xの巨大な指が公平を凄い勢いで揺らす。

その振動がこれが現実であると無情に告げる。

公平には、気を失う事さえ許されないのだ。

Xは楽しそうに自分の開発のコンセプトを語る。

曰わく、核兵器より強力で、核兵器より強力な兵器も効かない程頑丈で、核兵器より残虐な存在だそうだ。

だが、最後の残虐性は公平を食べても完成しない。

その後すぐに街に出て人を殺し少しづつ完成させていくそうだ。

公平の死はそのまま、世界の死だとXは言つ。

公平は公平で逆に吹っ切れてきた。

食べられるのが自分でもそうでなくとも、結局すぐ死ぬのは同じだと考えたのだ。

「早く夜にならないかなあ。ずっと街に遊びに行きたかったんだ」

「それで人間狩りか世界征服か。凄い遊びだ」

「んー。小人を苛めるのは好きだけど殺すのは別に好きじゃないし、世界征服とか面倒だし、本当はどうでもいいんだよね」

「今のところ、俺は苛められてないよ」

「君は特別だよ」

「可哀想と?」

「いや、さつきまでフレンドリーだった相手に食べられる方が残酷かな、って」

「結局それかよ!」

実際、二人は少しずつ仲が良くなつてきている。

とはいえ、Xはより残酷になるのが目的であり、公平はただ吹っ切

れただけなので結果的にそうなつただけだが。

二人は暫く話し合つた。

チャイムが鳴つたのは突然だ。

「俺の最後かな」

「お昼御飯だよ」

さすがにXの食事は多かつた。

「俺を食べただけじゃ足りないだろ」

「そうだね。けど、その後、街に行くからその時に食べるよ
さすがに何を食べるのか 分かつてはいるが 聞けなかつた。

突然、公平の中にある疑問が浮かんだ。
大したことではないが、分からぬまま死ぬのは悔しい。

だから、気軽にそれを聞いてみた。

「Xはファルコ、つていう組織は好き？」

「別に。君を食べるのも、世界征服するのも街に行きたいからだし、
正直どうでもいいかな」

「(こ)の壁を壊したり出来ないので？」

「出来るよ」

「…勝手に外に出ると電撃が流れたりするとかは」

「いや、そんな事無駄だし。多分、今の組織の兵器じや絶対に僕は

倒せないよ

「…Xは人を殺したいの？」

「したくなつて」

「じゃあ、Xがここにいる必要性も、俺が食べられる理由もないじ
ゃんか！」

「……あれ？ 本當だ。何で分かんなかつたのかな？」

「知らないよ、そんな事。Xがそれに気付かないように組織が脳手術したんじやないか」

公平はヤケクソ氣味に言つ。

別に死ぬ必要がないとなればさつさとここから帰りたかつた。

一方、Xは公平の言葉を聞いて笑つて言つた。

「ありがとう。公平。うん。そうだね。組織がこんな簡単な事も気付かないように手術したんだね。流石にそれくらい出来るか。ハハ

ハ

Xは握り拳を公平の目の前に思い切り振り下ろした。

公平のさつきまでの怒りが消えた。

本氣でXに殺される氣さえした。

「ハハハ。ごめんね。お詫びに街に帰してあげるよ

「あ、え、あ」

Xは公平の返事も聞かず、彼を優しく握った。
だのに、公平はこのまま握り潰される気がした。

それ程にXは組織への、ファルコへの怒りを露わにしている。

「壁を壊すよー」

公平の返事など聞かずに扉の方向の壁を殴り壊した。

「ハハハ。柔らかいじゃん」そして、彼女は立ち上がった。

天井は意味を持たない。

彼女はそのまま突き抜ける。

「ここ的小人は全員、おつと…公平以外の小人はみんな殺すよー」

彼女は建物を踏み潰した。

部屋にカメラが有つたのかもしれない。

ファルコの人間は既に外に出ていた。

「おい！ X！」

公平はXに呼びかけるが、その声は届かない。

建物にいたファルコの人間は皆、武器を持ってきている。

Xが真実を知った時点で、彼女を処分しようとしたのだろうか。

だが、

「僕の改造のコンセプトを忘れたの？」

Xには効かない。

「組織の兵器にやられるようなら、僕を作る意味ないよね？君たち馬鹿なの？」

核兵器にさえ耐えるXにそれは何の効果も持たない。

「次はこっちからいくよー」

核兵器より強力な兵器を備えているが敢えてそれは使わない。

それでは彼女の怒りは收まらない。

Xの手のひらから巨大な銃身が現れる。

少し弱いエネルギー弾を足下の小人にギリギリ当たらぬよう、

撃つ。

「三つ目のコンセプトは核兵器以上の残虐性だっけ…」

公平は呟いた。

彼を食べるまでもなく、全部完成していたのかもしれない。

ファルコの人間は少しづつ弱つていった。

それでもXは足とエネルギー弾で更に弱らせ、逃げ場の無いような場所まで追い込んだ。

「馬鹿な小人だね。バラバラに逃げれば一人位は助かつたかもしれないのに」

追い込まれたファルコの人間は固まつて震えていた。

Xは全員まとめて潰せる足を彼らの真上に上げた。

「バイバイ

「X！待てよ！」

公平の声はようやく届いた。

今までずっと叫んでいたのだ。

「ああそうだね。公平も復讐したいよね

「そんなんつもりなんか無いよー。もう許してやれよー。」

Xは足を元の位置に下ろす。

「公平も馬鹿なの？ ファルコは世界征服を企む組織だよ。此処は本部じゃないけど潰しておいた方がいいじゃないか？」

「こいつらはもうそんな事できねえよー。このまま逃がしても変わら「公平さつきからうざいよ。」

Xが冷たく言う。

公平を軽くファルコの人間の集まりに放つた。

「え？」

状況が理解出来ない。

目の前に巨大なXの足。

見上げればXの苛立った顔。

「君もこいつらと同じただの馬鹿な小人だね」
再び足が上がる。

周りの人間の叫び声がする。

公平は、何も、言えない。

直前で足が止まった。

だがXの顔は苛立ちを見せたままだ。

「分かつた？ 僕は君なんか簡単に殺せるんだよ？ 君だけは助けてあげようと思つてたんだよ？」

「X？」

さっきまでの時間は幻だったのか？

目の前にいる巨人は本当にあのXなのか？ 「そうだ…」

彼女は、何か思ついたらしい。

楽しそうな、それでいて冷たい笑顔を見せた。

「ねえ公平？君が僕に謝つたら特別に助けてあげる。ただどうしても僕に潰されたいなら君の周りのクズたちを許してもいいよつ。どうする？」

「アルゴの人間は希望が見えずに泣き出した。

公平は下を向いた。

そして彼女は笑つて見下ろしている。

「迷うまでもないよね？公平？」

「うん。覚悟はさつき済ませたから。」

「「は？」」「

アルゴと少女の声が重なった。

「死ぬ覚悟はもう済ませたと言つたんだよ。…×

「どうせ、食べられるつもりだったし、手段が変わるだけで君に殺されるのは変わらないからね？」

少女は足を公平の真上に上げる。

ほんの一瞬で公平の命は消える、無慈悲なまでに巨大な力だ。

「ハハハ。本気なの？そいつ等はこの世界のゴミだよ。今なら訂正

していいよ。ほら何が正しいかなんか明確じゃないか

「俺が正しいと思ってんだよ！他の誰がどう言つても、俺が正しい

と思つたなら絶対に俺の中では正しいんだ！」

「ああそう！分かったよ馬鹿な小人くん。其処のクズたち邪魔だから消えて」

アルゴの人間は逃げ出した。

公平は目を瞑つた。

怖くない訳がない。

だが、彼は信じていた。

少女の、Xの言葉を

足は確かに近づいて

そして、公平のすぐ横を通過した。

「…するこよ」

少女の Xの声が聞こえる。

公平はXを見上げる。

「僕が本当は人を殺すのが嫌いなのを知ってる癖に」

「うん。だから怖くなかった」

嘘だ。

「あいつ等は潰せたんだよ！公平は嫌いじゃなかつたから出来なかつただけ！」

「あんな酷い事言つた癖に」

「あれくらいやらないと公平は退かなかつたろ！それに僕はファルコを裏切つた訳だから僕といふと危ないだろ！だから一度と会いたくなくなる様な事を言つて、あいつ等を潰して公平に危害が加わらないようにしたの！」

「分かつた分かつたよ。けどXには誰も殺して欲しくなかつたんだ。実際あいつ等も殺せなかつたろうけど」

「うつ…。そうだよ！復讐ついでに恐がらせて口封じするだけのつもりだつたよ！」

「…さて、俺は家に帰りたいよ」

「あ、送つてあげる。はい手に乗つて」

「そういえばXはこれからどうするの？」

「ふふ。国に利益と脅しをプレゼントしようかな。そうしたら家の一つ位は」

「Xを敵にするのは確かに怖いな。優しいけど

「…そんな事言つてて良いのかな？」

「え？」

「ふふ。帰つたら全力で苛めてあげる」
「か、勘弁してくれよ！」
「ダメ。一生苛めてあげるから覚悟してねー。」

終わり

(後書き)

Xは超科学力を持つた組織によってカリスマ性を保つため、そして、首領の趣味で完全に不老という事になっています。

うん。それだけ。

あー恥ずかしい恥ずかしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7969z/>

X

2011年12月25日17時49分発行